

臨床判断モデルに関する文献から母性看護学実習課題解決への方策

A strategy to address problems in the maternal nursing practicum based on the current literature on clinical judgment models

永田 華千代¹⁾ 木宮 高代¹⁾ 藤原 弘子¹⁾ 矢野 初美¹⁾
池田 彩加¹⁾ 角森 輝美²⁾ 松本 裕子³⁾ 外山 琉璃子³⁾

Hanachiyo Nagata Takayo Kimiya Hiroko Fujiwara Hatsumi Yano
Ayaka Ikeda Terumi Kakumori Hiroko Matsumoto Ruriko Toyama

要旨

母性看護学の看護過程実習において、新型コロナウイルス感染症 2019 (COVID-19) に関する問題が報告されているが、臨床判断能力を育成するための具体的な方策はこれからの研究課題である。本研究の目的は、看護学教育モデル・コア・カリキュラムにおける定義に基づき、母性看護学の看護過程実習における臨床判断能力習得のための学習目標である④「アセスメントができる」、⑤「看護実践ができる」の達成に向けて、COVID-19 パンデミック時の問題解決策を示唆することである。臨床判断モデルに関する文献から、以下のような問題解決プロセスが明らかになった。1) 既存の知識習得を強化し、2) ケースシミュレーション（紙上）で常に患者の反応に触れさせることにより、臨床判断モデルの枠組みを用いることで、学生が習得した知識を経験に基づく知識に変換しやすくなり、継続的にアセスメント能力を身につけられることが示唆された。3) 臨床判断能力の育成に必要な学習効果を高める方法として、NCLEX-RN®をベースとした臨床判断能力育成のための NCSBN フレームワークを使用することは、学習目標④の「アセスメントができる」を確実に達成する方法であることが示された。

Abstract

Problems related to the Coronavirus disease 2019 (COVID-19) have been reported in the nursing process practicum of maternal nursing; however, specific strategies to develop clinical judgment skills require elucidation. The purpose of this study was to provide suggestions to solve problems during the COVID-19 pandemic in achieving the learning goals of ④ “capable of assessment” and ⑤ “competent in nursing practice” for the acquisition of clinical judgment skills in the nursing process practicum for maternal nursing per the definition in the model core curriculum for nursing education. The literature on clinical judgment models revealed a problem-solving process that included the following: 1) enhancing the existing knowledge acquisition and 2) constantly exposing the students to patient reactions in case simulations (on paper), thereby suggesting that the use of the clinical judgment model framework facilitates the conversion of students' acquired knowledge to experience-based knowledge and allows them to continuously develop assessment skills. 3) As a way of increasing the learning effectiveness required for

1) 福山平成大学看護学部看護学科 〒720-0001 広島県福山市御幸町上岩成正戸 117-1

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Fukuyama Heisei University

2) 福岡看護大学看護学部看護学科 〒814-0193 福岡県福岡市早良区田村 2-15-1

Department of Nursing Faculty of Nursing Fukuoka Nursing College

3) 福岡学園 〒814-0193 福岡県福岡市早良区田村 2-15-1 Fukuoka Gakuen

the development of clinical judgment skills, the use of the NCSBN framework for the development of clinical judgment skills, which is based on the NCLEX-RN[®], was a reliable method of attaining learning goal ④, “capable of assessment.”

キーワード：母性看護学看護過程実習，課題，実習前学習，臨床判断モデル，NCLEX-RN[®]

Key Words：Maternity nursing Process practicum，Assignments，Pre-Practice Learning，Clinical judgment model，NCLEX-RN[®]

1. 緒言

2019年からの全国的な新型コロナウイルス感染症の影響を受けた看護学実習は、施設実習中止で実習調整等が生じている。文部科学省・厚生労働省は、代わり得る学修の実施により必要な単位等の履修を、施設実習の振替実習として学内実習や遠隔実習を承認し、医療関係職種等の各学校、養成所、養成施設の対応及び実習施設への事項で周知している(文部科学省・厚生労働省：新型コロナウイルス感染症への対応のため、医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等における実習等の授業の弾力的な取扱いの具体的な取組事例や個々の学生等の状況に応じた学修機会の確保等についてお知らせ、2022年4月14日)¹⁾。このような状況から母性看護学看護過程実習(以下母性看護学実習)も、新型コロナウイルス感染症状況に応じて、臨地実習(以下施設実習)と学内実習、オンライン実習、ハイブリット型を組み合わせた2週間の実習で展開されている²⁾。施設実習では、全国的な少子化の影響で分娩件数の減少がみられ、さらに新型コロナウイルス感染症も加わり、受け持ち患者の同意が得られにくい状況にある。学内実習も施設実習と同じく、学生は自己の健康管理とコロナ感染症対策に努め、1組の母子の対象者を受け持ち、妊娠期から産褥期にかけて母子の継続的支援の実際を学ぶ。そして、ウェルネス視点で、対象者のその人らしいwell-beingの育児を目指して

看護過程を展開している。実習内容のカリキュラムは、看護学教育モデル・コア・カリキュラムにもとづいて学修が進んでいる³⁾。看護学教育モデル・コア・カリキュラムの「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標では、以下のことが求められており、その本文を引用して述べる(文部科学省(2017)：看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標(平成29年10月大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会)⁴⁾。

学修目標としての発達段階に特徴づけられる看護実践の生殖年齢・周産期にある人々に対する看護実践のねらいは、リプロダクティブ・ヘルス/ライツの視点から、性と生殖の特徴を踏まえた健康を支えるための看護実践を学ぶ。特に、周産期にある人は、身体的・心理的・社会的変化や家族の変化への適応を求められる。これらの特性を踏まえて、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期における対象者や家族に対する看護実践を学ぶ。

学修目標④妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の身体的・心理的・社会的特性と生理的变化について理解しアセスメントできる。

学修目標⑤妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある対象者のヘルスプロモーションを理解し、看護を实践できる。

学修目標の①②③⑥⑦⑧⑨⑩項目は、「理解できる」又は「説明できる」であるが、学修

目標の④「アセスメントができる」・⑤「看護実践ができる」臨床判断能力育成を求めている。

そのために、2019年以降の新型コロナウイルス感染症禍で施設実習中止以降も各学校・大学は、学修目標④⑤の臨床判断能力育成の目標達成に向けてオンライン実習や学内実習等を組み入れながら実習目標到達に向けて邁進している。しかし、新型コロナウイルス感染症禍で展開される実習での学修目標④⑤の目標達成に向けての課題も多い。新型コロナウイルス感染症の影響による母性看護学実習の課題はこれまで報告されてきたが、その具体的な解決方法はこれからの研究課題である。

本研究では、新型コロナウイルス感染症禍での母性看護学実習学修目標の④「アセスメントができる」⑤「看護実践ができる」臨床判断能力育成への課題と方策を検討する。

II. 目的

本研究は、新型コロナウイルス感染症の影響下における母性看護学実習について、看護学教育モデル・コア・カリキュラム学修目標④「アセスメントができる」⑤「看護実践ができる」臨床判断能力育成の課題解決への示唆を得ることを目的とする。

III. 方法

1. 研究デザイン

文献検討

2. 対象文献の選定

1) 文献検索：会議録を除き、文献データベース医学中央雑誌 Web と大学の研究紀要を用いた。

2) 検索期間およびキーワード：新型コロナウイルス感染症以降の2019年～2022年の3年間とした。

2019年以降母性看護学実習の課題解決に向けて、以下のキーワードを用いて検索した。

(1) 本研究の学修目標④「アセスメントができる」学修目標⑤「看護実践ができる」を母性看護学実習の課題から述べられている文献を「母性看護学」「看護過程実習」「課題」「事前学習」について検索したところ、抽出された6件（児玉他・2022, 上野典子他・2022, 牛之濱久代他・2022, 大橋知子他・2022, 山田よしみ・2020, 工藤真理子他・2021）の文献を対象として選定した。

(2) 看護学教育モデル・コア・カリキュラムの「学士課程においてコアとなる看護実践能力の育成」から学修目標④「アセスメントができる」学修目標⑤「看護実践ができる」では、臨床判断能力が求められている。そこで臨床判断能力育成への課題解決に向けて、「母性看護学実習での臨床判断能力育成の文献」「臨床判断能力を高める NCLEX-RN®に関する母性看護学実習」を検索したが抽出されなかった。母性看護学実習を看護学実習のキーワードに変えて、「看護学実習での臨床判断能力育成から述べられている NCLEX-RN®」1件が抽出され、計7件を文献対象として選定した。

3. 文献検討の分析の手順

2019年新型コロナウイルス感染症以降の文献から学修目標④「アセスメントができる」⑤「看護実践ができる」臨床判断能力育成の課題と方策の分析に以下の項目に区分した。

- 1) 母性看護学実習看護過程展開時の課題
- 2) 母性看護学実習事前学習課題
- 3) 臨床判断能力育成の学修目標④「アセスメントができる」⑤「看護実践ができる」課題解決に NCLEX-RN®活用

4. 倫理的配慮

対象文献を抽出する際は、対象文献に偏りがないように医学中央雑誌 web を使用し

ワードを入力して検索した。本研究では、文献の使用において出典を明らかにし、著作権を遵守し実施した。

IV. 結果

1. 2019 年以降母性看護学実習看護展開時の課題

新型コロナウイルス感染症禍下での母性看護学学内実習やオンライン実習では、母児の変化を、実際に、観察することができない状況下であり、臨床判断能力育成への学修目標④「アセスメントができる」⑤「看護実践ができる」課題が報告された。

1) アセスメントの必要性についての課題

学内実習やオンライン実習中、多くの学生は、アセスメントの視点を追加し、看護計画の不足部分に気づくことができているが、提示された事例から必要な情報の選択できていない学生も多く見受けられた。

変化が著しい対象の理解と継続したアセスメントの必要性をどのように気づかせるか課題が取り上げられていた⁵⁾。しかし、学修目標④についてアセスメントの必要性に気づかない学生への具体的な課題解決の方策は、これからの研究であった。

2) シミュレーション教育への課題

教員は、母児の変化が著しい対象の臨場感を出すために、模擬事例に教員間のシミュレーションや ICT 活用等の教材を演習に組み入れて学内実習を展開していた。学修目標④学修目標⑤の臨床判断能力育成には、対象の理解と必要な看護に関する知識の獲得、技術習得を促進し、成功体験や自己効力感を高めるよう主体的学修方法を組み立てる必要性を報告していた⁶⁾。

さらに学習目標は到達できたが、シミュレーション教育では教員間のシナリオ・ファシリテートの詳細な内容・タイムマネージメント・模擬患者の工夫に課題を残していた⁵⁾⁶⁾。

3) 学習効果への課題

学内実習では時間的余裕を持って取り組めたが、模擬事例の限界からリアリティに欠け、情報収集やアセスメント、演習において臨地実習と差が出た⁷⁾。施設実習では、実習指導者や母親からのフィードバックによって、実習に意欲的に取り組むことができる学生もいることから学内実習では、模擬患者に依頼することも含め外部との協働や工夫により学習効果を検討することも課題であった⁸⁾。

2. 母性看護学実習事前学習課題

母性看護学実習学修目標④「アセスメントができる」⑤「看護実践ができる」を達成には、事前学習の重要性が報告されていた。

1) 事前学習の必要性

学生の知識獲得状況が母性看護学実習に影響しており、事前学習の知識を充実させる必要性が示されていた。

事前学習の課題のプレテスト・ポストテスト・ワークブック活用は、母性看護学実習評価項目と関連性がみられ、事前学習の有効性が認められていた⁹⁻¹⁰⁾。事前に事例展開、実習直前の技術演習等の実習に向けた学習支援することで学生は、知識・技術を獲得し実習に取り組むことができる。実習では事前課題にない知識には対応できない状況も発生するので教育方法の検討が必要であった¹¹⁾。

3. 学修目標④と学修目標⑤臨床判断能力育成の課題解決に NCLEX-RN®活用

新型コロナウイルス感染症禍の学内実習や施設実習で学修目標④「アセスメントができる」⑤「看護実践ができる」臨床判断能力育成については、2022 年度看護基礎教育第 5 次カリキュラム改正で臨床判断能力強化も示され、学生が主体的に学び看護実践能力を高め、効果的な実習体験ができるよう教育環境を整える強化を求められてきた¹²⁾。

学修目標④「アセスメントができる」の臨

床判断能力育成には、タナーの臨床判断モデルが活用され、2023年度より開始されるアメリカ看護師資格試験 NCLEX-RN®に取り入れられる。臨床判断能力の基盤強化の観点から、母性看護学実習の学修目標④「アセスメントができる」学修目標⑤「看護実践ができる」課題解決に、選出された文献 NCLEX-RN®の枠組みを活用した¹³⁾。

1) NCLEX-RN®の概要説明

2023年アメリカの看護師資格試験であるNCLEX-RN®を主幹とするNCSBN
奥らは以下の通り説明している。

(National Council of State Boards of Nursing)は、臨床判断能力の育成に臨床判断モデルTannerの「気づき」「解釈」「反応」「省察」4つの過程を枠組みとした出題/評価規準となる独自のモデル(CJMM: NCSBN Clinical Judgment Measurement Model)臨床判断プロセスと問題形式を掲げているCJMMは、レイヤー0からレイヤー4の5つの階層で、看護師が対応する患者のニーズとそのニーズに対応するための看護師のその状況にどのように意思決定するのかその過程を臨床判断として現している。レイ

ヤー4「環境要因」と「個人的要因」が、レイヤー2・3の臨床判断過程に影響してくる。

2) NCSBNが構築したレイヤー1・2・

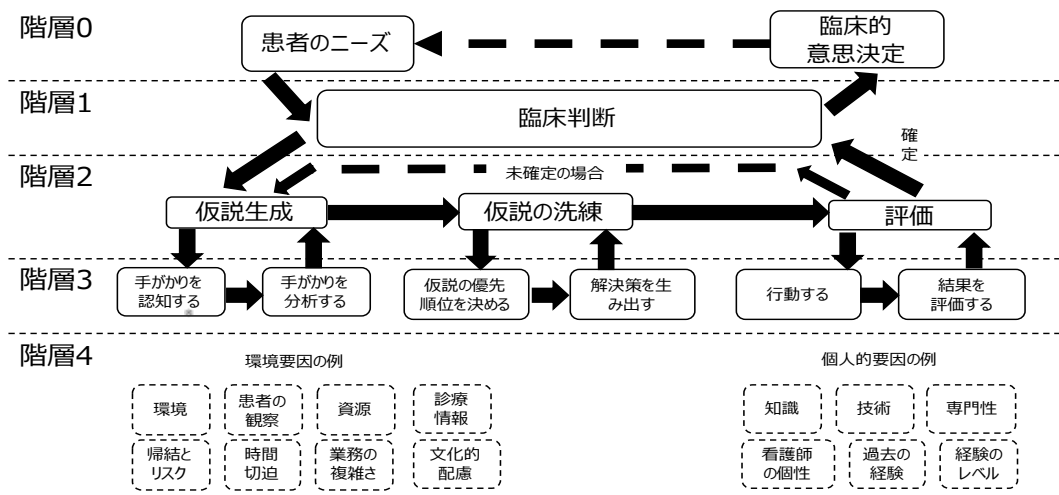
3の説明

奥(2022)を引用して、以下の内容を説明する。レイヤー3は6つの要素から成立している¹⁴⁾。

- ①「手がかりを認知する」その状況において何が重要なのか気づく、
- ②「手がかりを分析する」、
- ③「仮説の優先順位を決める」、
- ④「解決策を生み出す」、
- ⑤「行動する」、
- ⑥「結果を評価する」

レイヤー2については、レイヤー3とレイヤー2との間で看護師の思考と行動を評価しつつ、レイヤー2の評価が確定すると、レイヤー1の臨床判断、レイヤー0の臨床的意思決定と患者のニーズとつながる¹⁵⁾。

以上の内容をレイヤー1～3には、Tannerの「気づき」「解釈」「反応」「省察」4つの過程の要素が点在している。学内実習の紙上例も施設実習の看護過程もレイヤー3の①～⑥の過程を踏まえる。しかし、医中誌Webでは、NCSBNレイヤー3①～⑥課題解決への母性看護過程は、公表されていなかった。



奥 裕美、畠山有希：臨床判断能力の育成！NCLEX-RNの変化 看護教育 63 (1), 114, 2022.
Dickison P., Haerling K.A., Lasater K.: Integrating the National Council of State Boards of Nursing Clinical Judgment Model Into Nursing Educational Frameworks. Journal of Nursing Education, 58 (2), 72-78, 2019

図1 NCSBNが構築した出題/評価基準のモデル：CJMMNを参考に作成

引用：奥由美(2022)：実践的な思考を促す事例づくり試案 NCLEX-RN®の変化，看護教育，63(1)，p114.

V. 考察

1. 継続したアセスメントができないことへの対策

学修目標④「アセスメントができる」⑤「看護実践ができる」の到達目標に向けて、必要なアセスメントの情報に気づかない学生に、どのように気づかせるのか課題を見出していた¹⁶⁾。

学内実習では、模擬事例に教員間のシミュレーション等の教材を演習に組み入れて学内実習を展開し、課題は示されていたが、具体的な方策の提示は、これからの課題であった¹⁷⁾¹⁸⁾。

その課題について一部の方策を提案する。

1) 模擬事例を活用したシミュレーション教育の事例展開時継続したアセスメントができないことへ提案

模擬事例を活用したシミュレーション教育は、実際の看護のリアリティには限界があり、継続したアセスメントや看護実践による実際の患者の反応をタイムリーにとらえることができない。一方、施設実習でのベットの看護では患者の反応を絶えず捉えることができ、継続したアセスメントが可能になる。学内実習事例展開でも継続したアセスメントを可能にするには、事例の文脈に患者の反応を追加することが必要である。患者の反応が少ない場合、その状況において、何が重要なのか気づきにくいので、教員が事例作成時、継続した患者の反応をちりばめることで、変化が著しい対象の状況が分かり、母子アセスメントの必要性の「気づき」は可能になる。

2) 臨床判断能力育成への学習効果を高める課題についての対策

学生は、学内実習も施設実習も気づいたことを継続したアセスメントの「解釈」につなげることが課題である。この課題解決には、Tanner の臨床判断モデルの枠組み

を用いて、学生がその場面をどのように学んだのか、対象者の「反応」から、指導者・教員へ報告・カンファレンスで振り返る「省察」が大切である。学生にとっては、体験することが経験につながり、継続したアセスメントが可能になると考えている。学生が、変化の著しい母子へその人らしい well-being の育児を目指して看護過程を展開するには、「解釈」と「反応」をどれだけ結び付けて「省察」を活かして看護実践を行うことができるか重要である¹⁹⁾。

2. アセスメントの必要性に気づかない学生の事前学習

アセスメントの必要性に気づかない学生の実習直前までの事前課題の対策については報告されていないので提案する。

母性看護学実習の学生は、妊娠期・胎児期からの新たな知識が分娩期・産褥期・新生児期と継続したシームレスな看護知識の獲得が必要である。アセスメントに気づかない学生は、正常経過・異常経過の知識を習得し、演習時、その状況になぜこの技術が必要なのかその状況における促進される要因・阻害される要因は何か（原因・誘因・メカニズム）を臨床で用いられる状況に沿って実習直前までに準備することで、変化が著しい対象の状況が分かり、母子アセスメントへの「気づき」「解釈」は可能になると推測される。

3. 臨床判断能力育成の学修目標④・学修目標⑤への対応に臨床判断モデルを活用した NCLEX-RN®

学生が、学修目標④「アセスメントができる」⑤「看護実践ができる」臨床判断能力育成の課題解決につなげる過程には、今どのようなに問われているのだろうか。

アセスメントの育成については、Tanner の臨床判断モデルの枠組みを組み

入れ 2023 年度からアメリカの看護師資格試験が開始される。奥ら（2022）も文脈を重視し、時間的制約や生じる様々なリスクからの影響を考慮した臨床判断能力育成に向けての紙上事例を紹介している²⁰⁾。患者の反応を文脈に用いることは、学内実習の臨床判断能力育成にも活用される。さらに、学内実習や施設実習で育成される臨床判断は、NCSBN のレイヤー4・3・2・1・0 段階へつながっていく過程を根拠として、母

性看護学実習では Tanner の分類「気づき」「解釈」「反応」「省察」4 つの過程がレイヤー3の①～⑥の段階に含まれるので、施設実習が開始する実習直前までに、レイヤー3の①～④段階を臨床に特化した知識・演習・看護実践に向けた準備が大切であり、そのことが施設実習や学内実習で臨床判断能力を高め、学修目標の④「アセスメントができる」の課題解決へつながることが期待される（表1）。

表1：NCLEX-RN®を主幹とするNCSBN 枠組み活用したレイヤー3：①～⑥の取り組み

レイヤー ²⁰⁾²¹⁾ (階層)	母性看護学看護過程 (ナーシングプロセス)	母性看護学実習事前学習	実習直前 レイヤー3： ①～④段階の準備
レイヤー3： ①「手がかりを認知する」 その状況において何が重要か気づく	レイヤー3：①～⑥ ①情報収集 <input type="checkbox"/> その状況において何が、対象者にとって重要な情報・データであるか <input type="checkbox"/> 正常か・異常か	レイヤー3：①～④ 母性看護学看護過程展開 <input type="checkbox"/> 経過が正常分娩な母子と家族への援助の事例展開 <input type="checkbox"/> 帝王切開術後の母子と家族への援助の事例展開 <input type="checkbox"/> 母性看護学技術の演習： 妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期 <input type="checkbox"/> 母性看護知識習得 妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期・帝王切開術 <input type="checkbox"/> 多領域との関連性 ・帝王切開術後（急性期看護学との関連性）	レイヤー3：① 看護知識確認 (よりどころとなる枠組み作り) <input type="checkbox"/> 妊娠期 ・分娩期 ・産褥期 ・新生児期 ・帝王切開術 レイヤー3：② <input type="checkbox"/> どのような場面で、母性看護学技術を活用するのか ・その目的 ・意義・観察・看護ケア・看護評価へつなぐ 臨床に絞った技術の復習
②「手がかりを分析する」	②関連図作成・アセスメント <input type="checkbox"/> 促進される要因 阻害される要因 <input type="checkbox"/> 原因・誘因・メカニズム <input type="checkbox"/> 看護アセスメント情報の確認・データ分析	・小児看護学・家族看護学との関連性（親役割・子どもの発達過程・家族関係等）	レイヤー3：④ <input type="checkbox"/> 日々の行動計画 記載方法の確認 ・看護目標 ・看護計画 ・本日の学びと気づき
③「仮説の優先順位を決める」	③仮説の優先順位 <input type="checkbox"/> 看護の方向性	・社会資源の活用・地域・在宅看護学	
④「解決策を生み出す」	④看護目標、看護計画 <input type="checkbox"/> 看護課題・看護問題解決		
⑤「行動する」	⑤看護実践		

⑥「結果を評価する」	⑥看護評価 <input type="checkbox"/> 効果の有無と関連性 (小児看護学・成人看護学・家族学・地域・在宅看護学) <input type="checkbox"/> 看護の方向性の検討	(妊娠中・産後の 母子支援・地域包括ケアシステムの多職種連携) <input type="checkbox"/> 看護理論の活用 セルフケア理論, ウエルネス, エンパ ワーメント, ヘルス プロモーション, well-being, 愛着	・明日の看護の方向性
------------	---	--	------------

VI. 結語

学習目標④と⑤の課題については、学生が継続的にアセスメント能力を身につけることができないことが主な問題として取り上げられていた。学生がアセスメントの必要性に気づき、学習効果を高めるにはどうすればよいか課題として挙げられたが、解決策はこれからの課題であった。本稿では、今後の学習効果に向けて臨床判断モデルに関する文献から母性看護学実習課題解決への方策を提案した。

1. 継続したアセスメントができないことへの対策

学内実習では、継続した患者の反応を、模擬事例にちりばめることで、学生は対象者の状況に「気づき」、さらに「解釈」「反応」「省察」につなげるには、その場面をどのように学んだのか、対象者の反応から、指導者へ報告時に振り返る「省察」が大切である。学生は体験することが経験につながり、継続したアセスメントが可能になる。

2. 母性看護学実習事前学習への対策

アセスメントに気づかない学生には、事前学習に以下の内容を取り入れる。学生が臨床の状況で活用できる促進される要因・阻害される要因等のエビデンスの知識を実習直前までに獲得することで、臨床判断が可能になる。

3. 学修目標④学修目標⑤の課題解決への学習効果を高める方法に NCLEX-RN®活用した臨床判断能力育成

アセスメントの育成については、学内実習の事例展開・学内看護過程の臨床判断能力育成に患者の反応を文脈に用いる。それは、Tanner の分類「気づき」「解釈」「反応」「省察」4つの過程がレイヤー3に含まれるので、施設実習・学内実習が開始する実習直前までレイヤー3：①～④の段階を臨床に特化した知識・演習・看護実践に向けた準備が必要である。

本研究は、学修目標の④「アセスメントができる」の課題解決へに向けて取り組んだが、学修目標⑤「看護実践ができる」の課題解決へは今後の課題である。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

文献

- 1) 文部科学省・厚生労働省：新型コロナウイルス感染症への対応のため、医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等における実習等の授業の弾力的な取扱いの具体的な取組事例や個々の学生等の状況に応じた学修機会の確保等についてお知らせ、2022年4月14日。
- 2) 文部科学省・厚生労働省、前掲書、1) 2022年4月

- 14日.
- 3) 文部科学省(2017):看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標(平成29年10月大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会);37.
- 4) 文部科学省(2017),前掲書,3)37.
- 5) 児玉一枝,熊谷優花,志賀くに子,他1名(2022):新型コロナウイルス感染症の影響下におけるオンライン・学内実習を活用した母性看護学実習の実践報告(解説),秋田県母性衛生学会雑誌,35,22-27.
- 6) 上野典子,大澤豊子,森田桂子,他1名(2022):Covid-19禍における母性看護学実習の学生の実習満足度・到達度の関係 臨地実習時間減少から生じた課題の分析,了徳寺大学研究紀要,16,271-284.
- 7) 牛之濱久代,大橋知子,森口範子(2022):コ新型コロナウイルス感染症禍における母性看護学実習の工夫と課題(第1報)実習の概要と看護過程展開の実践報告(解説),九州看護福祉大学紀要,105-110.
- 8) 大橋知子,牛之濱久代,森口範子,他2名(2022):新型コロナウイルス感染症禍における母性看護学実習の工夫と課題(第2報)シミュレーション演習の実践報告,九州看護福祉大学紀要,22(1),111-119.
- 9) 山田よしみ(2020):母性看護学実習における事前学習課題の有効性の検討,三育学院大学紀要,65-72.
- 10) 工藤真理子,平田礼子,風間みえ(2021):母性看護学実習におけるポケットサイズ型ノートの事前学習に対する学生の認識,日本医療科学大学研究紀要,13;85-92.
- 11) 山田よしみ,前掲書,9),65-72.
- 12) 大井美樹・佐藤みつ子(2022):カリキュラム改正へ向けた本学看護学科の取り組みと今後の課題,了徳寺大学研究紀要,16,41-47.
- 13) 奥由美(2022):実践的な思考を促す事例づくり 試案 NCLEX-RN®の変化,看護教育,63(1),114-121.
- 14) 奥由美,前掲書,13)114-115.
- 15) 奥由美,前掲書,13)114-115.
- 16) 児玉一枝,熊谷優花,志賀くに子,他1名,前掲書,5)22-27.
- 17) 牛之濱久代,大橋知子,森口範子,前掲書,7)105-110.
- 18) 大橋知子,牛之濱久代,森口範子,前掲書,8)111-119.
- 19) 細田泰子(2022):【学校と臨床の連携が鍵を握る臨床判断能力育成の試み】(PART1)総論臨床判断能力を拓く学習環境,看護展望,47(3),0186-0192.
- 20) 奥由美,前掲書,13)114-121.
- 21) NCSBN・Next Generation NCLEX® News Winter 2019,Clinical Judgment Measurement Model,2019,<https://www.ncsbn.org/NGN-Winter19.pdf> 2021/10/22 accessed.